

### 33 【のんだる】

村には大酒のみが、たくさんいました。

冠婚葬祭（かんこんそうさい）はもちろん、日々の楽しみは酒を飲むことくらいだったのでしょ。

完ちゃんやぼくら子どもには、川遊び山遊び広場遊びがあるけれども、村の大人たちにとっては、川も山も広場も仕事の場所でした。

あるとき、完ちゃんと話をしている、

「なぜに、おとなはさけをのむんか」

という疑問に、ぶちあたりました。

「みずじゃ、あじがしないからのう」

「いんや、よっぱらうのがおもしろいんじゃろ」

「よっぱらうって、どんなかんじなんか」

「ふねでよっぱらうじゃろ。あれとおなじじゃろ」

「あれはきもちわるい。あれとおなじじゃなからう」

「かんがえても、よくわからんのう」

「そういうときは、かいじいじゃのう」

というわけで、懐爺のところに行きました。

懐爺は、しきりに背いてからこういいます。

「金ちゃんも完ちゃんも、いいところに目をつけましたね」

誉められるとはおもいもしなかったので、ふたり顔を突き合わせて大いに笑ったものです。

でも次の言葉に、ふたりの笑顔はひきつったのです。

「さすがに、おばけ好きはおばけに目をつけるのが早いですね」

「おおお、おばけたあ、どどど、どういうことかのう」

ぼくの百倍は、おばけをこわがる完ちゃんがききました。

「お酒をいくら飲んでも酔っぱらわない人もいます。たとえば村長さんなどそうでしょう」

「たしかに、そうじゃ」

完ちゃんがふるえているので、ぼくが応じました。

ぼくの母親はお猪口（ちょこ）一杯のお酒で、すっかり酔っぱらってしま。

「同じ人間なのに、おかしいとはおもいませんか」

「そりゃおかしいのう」

「【のんだる】のしわざですよ。【のんだる】はお酒を飲む人に入り込んで、わるさをするおばけです」

「さかやの、まわしものかのう」

「いえいえ、酒屋の主人も【のんだる】にやられて、肝臓をこわしています」

「【のんだる】は、かんぞうにはいりこむんか」

「肝臓にも胃腸にも、時として脳味噌にも入り込みます。酔っぱらって狂って暴れるひとはそれです」

「そんなちょうには、はいりこまんのか」

「とんでもない。村長は誰よりも大酒飲みです。村長に入り込んだ【のんだる】は、村長がお金持ちだと知っているから、いくら飲んでも酔わないよう、わるさをしているんです。最後の最後に、ひどいことをするためです」

「あばれても、おとなしくても、【のんだる】のしわざかい」

「そのとおり。【のんだる】は賢いおばけですから、貧乏人がお酒を飲み過ぎて、もうお酒を買うお金がなくなると、あとは【しんだる】に委（ゆだ）ねて病気で殺してしまうのです」

「おそろしいのう。やっぱしさかやの、まわしもんだのう」

「いえいえ、【のんだる】はお金ほしさに入り込むではありません。人間を破滅させるために入り込むのです」

「おさけで、にんげんが、はめつするんか」

たしかに村でも破滅した者は何人もいます。

けれども酒で破滅したのではなく、酒に頼るくらい苦しい生活だったから、破滅したのだとおもっていました。

「それは鶏と玉子ですよ。どっちが先でも結果は同じ、その結果は【のんだる】が計画したものなのです」

「ならば、そんなちょうはどうなんじゃ。【しんだる】なんかきそうもないがのう」

「村長は【のんだる】にとって、まだ生かしておいて都合のよい存在なのです。だからまだ破滅させない。【のんだる】にとって利用価値がなく

なったそのときは【しんだる】に委ねるでしょう」

「よくわからんが、さけをのんじゃあいかんということか」

酒屋を【のんだる】の回し者と疑ったのと同じ次元で、懐爺は禁酒組織の回し者とおもわれました。

それでそうきいたのだけれども、懐爺の答えは意外なものでした。

「じつはわたしもお酒を飲みます。お金がないからたまにですけど飲みます。ただ飲むときは【のんだる】と相談というか、掛け合います。今日はこれだけ飲むがよろしくと。すると【のんだる】はしぶしぶ〈よろしい〉というのです。うっかり掛け合うのを忘れたら、とんでもないことになりますから、そういうときはすぐに飲むのをやめます。【のんだる】は拍子抜けの声で〈つまらん〉というけれども、騙されません。つまらんのはわたしのほうですからねえ。つまり」

「めんどうじゃのう」

ぼくは遮（さえぎ）りました。

ぼくは面倒だから、大人になっても酒は飲まないと心にちかったのです。

完ちゃんは【のんだる】がこわいから、大人になっても酒を飲まないと心にちかったとのことでした。

もちろんこのとき、ふたりは、心の誓いを平気で破ってしまう、【やぶったる】というおばけの存在をしらなかつたのですが。